

E. ストラウス

## 『サー・ウィリアム・ペティ 一天才の肖像』

E. Strauss, Sir William Petty, Portrait of a Genius. London, The Bodley Head, 1954. 260 p.

## I

著者 E. ストラウス氏は、オーストリアに生れ、その後イギリスに歸化した人であるという。著者の名をこのように表現するのが正確かどうか、また著者が現にどのような大學その他の研究機関に属している人か、いずれも私は知らない。が、知りうるかぎりでは、著者はイギリスに歸化してから現在までに、つぎの6冊の書物を公刊している。私が手にしたのはこのうちの(4)(5)(6)の3冊で、通讀しえたのは(6)である。

- (1) *Soviet Russia*. London, 1941.
- (2) *Anatomy of Social History*. London, 1941.
- (3) *Bernard Shaw*. London 1942.
- (4) *George Bernard Shaw*. London, 1950. 74 p.
- (5) *Irish Nationalism and British Democracy*. London, 1951. X, 307 p.
- (6) *Sir William Petty, Portrait of a Genius*. London, 1954. 260 p.

ところで、著者がペティ研究に着手したのは、上記の(5)を執筆するために、17世紀アイアランド史を研究し、その過程においてペティの諸著作に接した——つまりアイアランド史研究の資料として「アイアランドの政治的解剖」その他のペティの著作を読んだ——ことにはじまるという。〔そして G. B. ショウの祖先であるアングロ・アイリッシュの地位が決定的なものになったのは、まさに17世紀アイアランドにおいてであったことを想起するならば、上記のリストから感得される著者の幅広い関心は、すくなくとも(3)以後、内面的脈絡をもった研究コースにおいて示されたものと考えられる。〕それはともかくとして、著者のペティ研究がアイアランド史研究を基礎としているということは、注目すべきであろう。というのは、ペティの主著を一見してもうかがわれるように、かれの生涯、したがってまたその思想・方法および理論は、17世紀アイアランド社会ときわめて密接にむすびついているからである。

## II

アイアランド史研究を動機として着手されたこの研究

において、著者はペティの経済学説や理論に関するモノグラフを企圖したのではない。序文に明記されているように、著者の研究は「ペティの心情や性格を既存の公刊資料にもとづいて再構成すること」(p. 7)を目的としている。これを一層具体的にいうならば、ペティの時代はイギリスにおける資本主義的社會關係の創出期であり、近代科学一般の創始期であったが、この時代に活動した「ペティの性格・ペティその人を形づくった諸力・かれが應答した諸問題・近代思想および科学の成長に對するかれの創造的寄與」を主題として(p. 8)、ペティの「全傳」(full-length biography)ではなしに「傳記的肖像」(biographical portrait)をえがく、というのが著者の研究目的・方法なのである。このことは、端的に“Portrait of a Genius”という形で本書の副題とされているが、著者の研究の眼目は、ペティの思想や理論そのものではなくて、それらの擔い手あるいは創造者としてのペティその人の個性および行動を、社會的視野のもとにおいて見きわめることにある、と要約しうるであろう。

## III

以上の目的・方法のもとになされたこの研究は、3部19章からなる本書の内容をなしている。第1部「努力」(Endeavour)、第2部「蹉跌」(Frustration)、第3部「成果」(Achievement)が各部のタイトルで、第1—2部はいわばペティの生涯であり、第3部はその業績に相當する。第1部は、時代的には市民革命の前夜から革命をへて、共和國の末期までである。著者は、ペティの生誕(1623年)から海員・數學者・發明家・解剖學者・測量家・行政官としてのペティの少青年時代を述べるばあい、最大の力点を正當にもペティが共和國時代のアイアランドで主宰した土地測量・沒收地分配、すなわち“Down Survey”と名づけられた事業におき、第1部7章のうちの4章をその敘述にあてている。クロムウェルのアイアランド征服を、著者はこの世紀におけるイギリスの政策の頂點と考える(p. 66)。そして“Down Survey”をこの政策の基礎をなす事業とし、ペティは根本的には致富への欲求からこの事業をひきうけたが、それは「底知れぬ自信・無盡藏な機略・天才的行政手腕をもつ」(p. 65)かれの偉大な組織力をまっけてはじめて成就しえた事業であった、としている。さらに著者は、“Down Survey”の意義をそれが最初の近代的土地測量であったという點にみとめ、ペティの地圖をカルトグラフィーの歴史における道標であるとし(p. 71)、その主體的基盤を若き日のペティを特徴づける數學・機械工學・解剖學についてのすぐれて實際的な教養に求め、他面において、アイアランドの土地收奪をめぐるペティがまきこ

まれた係争問題を詳述し、ペティの複雑な個人的ならびに社会的性格を分析しようとしているのである。

## IV

第2部は、時代的には王政復古(1660年)から名譽革命の前年におけるペティの死(1687年)までの約30年間であるが、著者は第1部において年代を追ってペティの人間の成長をあとづけたのに反し、第2部においては敘述方法を全く一變し、「財産家」・「多才の人」・「野心家」・「原理の人」・「人間」・「敵と味方」の6章にわたって、政治的には妥協的な反動期としての王政復古時代に活躍したペティを観察している。著者が敘述方法をこのように變更し、壯年時代以後のペティについていわば6枚の肖像をえがいたのは、「王政復古という新革命がペティの餘生を全面的にかえ、もはやペティは単一の原理にひきいられることなく、きわめて多面的な生活を送るようになった」(p. 90)という理由にもとづいている。

王政復古を「新革命」(new revolution)と規定することについて著者は別に根據を示していないが、それはともかくとしても、著者は王政復古後のペティの全生活を前記のように「蹉跌」した人のそれとして特徴づけている。そして致富者としては必ずしも成功せず、多面的才能にめぐまれた學藝愛好者(virtuoso)としては支配者にいれられず、政治的野心家としては完全に失敗したペティが、なおかつ「もっとも成功した政治家よりも高いところにたちえた」(p. 135)根據を、ペティがかかげた統一的な原理——生産的労働の重視——に見だし、ペティを當時勃興しつつあった“Middle class”の思想的代表者のひとりとして位置づけている(第11章)。しかも著者は、ペティのこの原理を、なぜペティが「クェイカーの狂信にもレヴェターの革命的熱狂にも左袒せず、……かれの思想が1個の體系に定着し、その發出の〔母體をなす〕諸觀念そのものよりも一層有效かつ一貫したものとなった」かの根據としているのである(pp. 139, 141)。私は、著者が全體としてのペティにこの原理をみとめ、それを高く評價しながら、同じペティをいわば並列的に6枚の肖像にえがくことによつてほぐしてしまつたのか、疑問視せざるをえない。

## V

第3部は、ペティの全生涯を通じての諸々の成果である。著者は、この最初の章でペティの著作を概観し、つづいて「數・重量・尺度」・「政治的解剖」・「人類の増殖」・「普遍的尺度」の4章でペティの成果を特徴づけ、最後の章で「不可能事の追求」(Aiming at impossible things)をこととした人・「社會の技師」(social engineer)としてのペティの行動・事業の特徴を要約してい

る。そして生來行動的で、一見して諸事象の本質を見ぬくけい眼なペティ、同時に「野心的で進取の精神に富み、貪欲で恐れを知らず、しかもつねに成功を夢みていたペティ」(p. 173)が、「行動の人として失敗したことは思想家として成功したことの不可缺の條件であつた」(p. 180)としているのである。

著者がここでペティの理論・方法の全體としての性格を問題にするばあい、その基礎を経験論的新哲學を基調とする數量的觀察・推理(數學)と解剖學とに見いだしていることは全く正當である(第15—16章)。そして著者が、この方法を社會的諸事實の研究にアプライした典型的事例をペティの國富推計に求めていること(p. 198)、また、ペティの人口増加論が實質的には「餘剩利得」(superlucration)の増進を基礎として資本蓄積の問題を豫見していたのだと指摘していることは(第17章)、いずれもきわめて妥當である。さらに、同じく數量的分析方法によりながら、ペティと近代經濟學者とが本質的に相異なる特質をもつ點の指摘も示唆ふかい(pp. 186—187)。

ところで、第18章「普遍的尺度」は、第2部において著者が「原理の人」(第11章)としてペティの統一原理的思想を論じたのと實質的には表裏する章であろう。が、ここで著者は、「富の父母は労働と土地である」という思想を労働價値の理論として定式化するばあい、ペティが統計的實證的方法と抽象的推理による方法とを用いたということを正當にも指摘しながら(pp. 214—215)、ではこの両者が内面的にどのように關連し統一されていたのかについてほとんど論じてはいない。これを論ずることは、本書の目的から見ればあるいはその範圍外のことかも知れない。しかし、ペティの政治算術が政治的解剖と一體をなして市民社會における富の實體の究明を志向していたということを想起するならば、必ずしもそうとのみはいえないであろう。そしてこの不十分さは、おそらくは著者が、第1部において“Down Survey”の意義を主として前述の點にのみ求めていること、そして第2部において「原理の人」としてのペティを高く評價しながら、ペティの思想形成の過程をいわば平板なものにし、ペティの才能の偉大さを並列的に「經濟學・解剖學・自然科學・數學の結合」(p. 112)にありとされていること、さらに最後の章において、労働價値の理論と“Down Survey”とを(前者を獨創的な社會思想家、後者を近代地理學の先驅者としての)ペティの不朽の業績として並置していること、に照應するものであろう。以上のほか考うべき點はなお多いが、ここでは割愛せざるをえない。

## VI

「ペティは龐大な知識をもっているにもかかわらず、いまもって不可能事の追求をやめない人だ」と評價したのはチャールズ2世であったという(p. 136)。同時代者からこう考えられていたほど、ペティの視野は廣くまたその洞見は深かった、と著者はくりかえして述べている。そしてこのことの根源を、比類なく多面多彩で、しかも複雑にいら組んだペティの性格や個々の活動やまたその成果に即して掘りさげたのが全體としての本書の内容であり、同時にこの研究の積極的な意義であろう。ペティの経済學説や理論に関するモノグラフとしては、私の知るかぎりでもすでに W. L. Bevan (1894), C. H. Hull (1899, 1900), M. Pasquier (1903), G. Pirou (1911), W. Müller (1932), L. Hogben (1938), M. Greenwood (1933, 1948) 等々の研究がある。そして地理學者としてのペティについては Y. M. Goblet (1930) の大著があるといわれている。さらにペティの權威ある全傳的著作としては E. Fitzmaurice (1895) の研究があること周知のとおりである。以上の諸業績は、それぞれに積極的な意義を主張しうるものであろうが、E. ストラウス氏のこの研究は——學說史的研究ではないにしても、否むしろいわゆる學說史的研究ではないからこそ——ペティの経済學的理論や思想の研究に貴重な示唆と素材とを與えずにはおかないであろう。のみならず、この研究は、およそ現代の経済學の諸理論の形成に實質的に寄與した思想や理論が、どのようなものであったかを解明しようとするばかりではなく、一層正しい發展のために、それらがどのようにして生成したのかを探求しようとする研究者に對しては、一層根本的な示唆を與えるであろう。

本書が海外の學界でどのような評價をうけているか私は知らない。“*The Times Literary Supplement*” (No. 2731. Jun. 4, 1945) は、著者の意圖に即して本書をおだやかに紹介している。“*The Economist*” (No. 5794. Sept. 11, 1945) も本書をとりあげ、「失敗をかさねた設計者」(Planner Manqué)としてペティを特徴づけ、本書の著者はペティの生涯を「慎重にそしてときには銳利に」述べているが、その社會的背景を「單純化しすぎたり曲解したりしている」點があることを指摘し、E. Fitzmaurice の『ペティ傳』(1895年)が依然として“best study”であるとむすんでいる。“*The Economist*”が指摘している點は、輕々には論じえない性質の問題をふくんでいるが、同紙が本書を E. Fitzmaurice の全傳的著作とくらべて評價していることは、前述した著者の意圖やすでに見た本書の性質・内容から考えて、けっして

妥當ではないであろう。兩著はそれぞれに特質をもち、意義を主張しうるといわねばならない。

(1954.11.15 松川七郎)

ブラックウェル, ガーシック

## 『ゲーム理論と統計的決定』

David Blackwell, M. A. Girshick, *Theory of Games and Statistical Decisions*, John Wiley & Sons, New York, 1954

ゲームの理論、判定函數論等で鋭い理論を展開している Blackwell 並びに、重厚な論説を書くと共に實際面の業績も多い Girshick 兩教授の共著が出たことは何としても斯學のために喜ばしいことである。本書は (1), (2), (3)<sup>1)</sup>等に表われている諸結果を骨子とし、更に新しい成果を織込みながらゲーム論の立場から統計學の統一的展開を示している。A. Wald がその著 (4) で、従來の統計的推定、檢定等の問題をより一般化して統計的判定函數の思想を展開するとき、その理論とゲーム理論との類似性を指摘すると共に、Neumann-Morgenstern の Minimax 原理をその據り所としている。本書はより積極的に、判定函數の問題をすべてゲームの理論として構成しようとの立場で一貫している。例題も多く、Wald の本よりずっと具體的になり、數學的美しさよりも統計理論の構成にその重點がおかれている。更に今まで損失函數があまり反省なく導入されたのに對し、效用概念の下でその位置づけを明確にしたことも見逃せない點であろう。本書に現われている數多くの新しい思想と方法とは、これからの統計學の動向を示唆するものとして誠に興味深いものがある。12章 350頁に上る本書の内容とそれに對する感想とを限られた紙數で述べさせて頂こう。

第1章 Games in Normal Form と第2章 Values and Optimal Strategies in Games では、純粹にゲームの理論、しかも零和2人ゲームの理論が述べられると共に凸函數、凸集合の理論が手際良くまとめられている。normal form における零和2人ゲームは  $G=(X, Y, M)$  と表わされる。ここに  $X(Y)$  は player I (II) の pure strategy  $x(y)$  の可能なすべての集合、 $M$  は  $X \times Y$  の上に定義された有界數値函數、即ち pay-off function である。player I, II が互に獨立にそれぞれ  $x, y$  を選擇するとき、player II から player I に  $M(x, y)$  だけの支拂がなされるゲームが  $(X, Y, M)$  である。第3章

1) 數字は終りの脚註の文獻の番號を示す。